

第2章 武士の活躍と信仰



守護大名と奉公衆・寺社勢力



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代 昭和(戦後)・平成時代

紀伊国守護畠山氏と寺社勢力

山名義理の後、紀伊の守護となったのが中国との貿易で豊かになった山陽地方の大名大内義弘です。その大内義弘も1399（応永6）年、足利義満と対立して滅ぼされ、畠山基国が守護となりました。基国はかつて紀伊国守護であった畠山国清の甥で、当時は将軍を助ける管領であり、紀伊のほかに河内（大阪府）、越中（富山県）などの守護を兼ねる有力な守護大名でした。

室町時代の紀伊国が他の国と違うところは、高野山・粉河寺・根来寺・熊野三山（本宮・新宮・那智）など、寺院や神社の勢力が強いことでした。これらの寺社は、地元には多くの荘園を持ち、独自の武力も持って、強力な支配を行っていました。1418年には、守護畠山氏の軍と熊野三山の軍が、田辺の支配をめぐる衝突し、守護方が大敗しました。また、1460（長祿4）年には、守護の軍と根来寺との間で、灌漑用水の使用をめぐる戦いになりましたが、これも守護方が敗北しています。このように寺社の武力は、守護畠山氏にとって、たいへん手ごわいものでした。

奉公衆湯河氏

畠山氏は基国の後も、1573（天正元）年に室町幕府が滅びるまでの間、紀伊国の守護大名でした。そのため、次第に畠山氏の家臣となる武士が増えていきました。

しかし、南北朝の動乱の途中から幕府方についた湯河氏は、当時守護の力が弱かったこともあって、直接将軍の家臣となりました。湯河氏はもとは道湯川（田辺市）を根拠地としていましたが、南北朝の動乱の間に、小松原（御坊市）に進出しました。有力な武士として活動した手取城（日高川町）の玉置氏、竜松山城（上富田町）の山本氏も湯河氏と同様に、将軍の家臣となりました。直接将軍の家臣となった地方の武士を奉公衆といいます。

奉公衆は京都で将軍の護衛を行ったり、守護大名が大きな力を蓄えて、幕府に逆らわないよう監視する役目を持っていました。奉公衆は守護の力が及ばない支配地域を持っていました。紀伊国は奉公衆や寺社勢力が強かったため、守護畠山氏は十分に力を伸ばせませんでした。

湯河氏は日高平野を一望できる山の上に亀山城を築き、そのふもとに普段生活するための館を築きました。多くの戦国大名は、山城とふもとに館を築いていますので、湯河氏の計画は、



湯河氏の居城であった亀山城跡と小松原館跡（御坊市）

戦国大名と同じものといえるでしょう。戦国時代の湯河氏は、日高郡から有田・牟婁郡へと勢力を拡大していきました。

応仁の乱と紀伊国

15世紀の中ごろ、8代将軍足利義政のときに、畠山氏の跡継ぎをめぐり、義就と政長の間に争いがありました。これがひとつの原因となり、1467（応仁元）年、畠山義就と政長が京都で戦ったのをきっかけに、応仁の乱が occurred。紀伊も畠山氏が守護だったことから戦乱にまきこまれましたが、根来寺や湯河氏を味方につけた政長方が、有利に戦いを進めました。



畠山氏の守護所跡（現養源寺）

15世紀中ごろの紀伊国では、政治が大きく変わることになりました。それとともに紀伊の守護所は、紀北の大野（海南市）から紀中の広（広川町）に移されました。守護所とは、守護が領国の支配を行うために設置した役所です。移転の理由は、15世紀半ばには守護の力が紀南にも及ぶようになり、大野では不便になったからと考えられています。守護所が置かれた広は紀伊の政治・経済の中心地として、戦国時代をとおして栄えました。



わかやまの知識



【宗祇と連歌】

室町時代盛んだった文芸に、短歌の上の句と下の句を交互に詠んでいく連歌があります。紀伊ゆかりの連歌をたしなんだ人として、心敬と宗祇が知られています。心敬は名草郡田井荘（和歌山市）出身で、京都の十住心院の住職となり、1463（寛正4）年には故郷に帰って『ささめごと』という連歌論を著しています。

心敬に連歌を学んだ1人に宗祇がいます。宗祇は有田郡藤並（有田川町）出身とも言われ、各地をまわって連歌を広めました。宗祇と親しかった人物の1人に、紀伊国の武士湯河政春がいました。宗祇は小松原（御坊市）で湯河政春のために連歌を詠んだと言われています。政春自身も連歌を詠み、その歌は『新撰菟玖波集』という宗祇が編集した連歌集に載せられています。



伝宗祇屋敷跡